

Wild Flowers, 2ed. (1961) には “Perennial by a rootstock, increasing by stolons and offsets” (イタリックにしたのは筆者) とあり、他の米書にも同様の記文を見た。要するにハルジオンの栄養繁殖は長短の匍枝、即ち茎性の器官によるものである。これは下記のように誤りである。1) 母株から地表下を横走して発芽する器官は太さ 0.5-1 mm 位、鱗片葉を欠き、軟毛が多く、2) 横断面を鏡検すれば、厚い皮層に囲まれた中心部に明瞭な内皮を伴った 6 原型の放射維管束がある。内皮に顕著なカスパー線があり、木部は無論外原型で篩部と互生する。更には内生的に側枝を形成するのが認められる。かかる形態の器官が新苗を形成するのであるから、それは匍枝という茎性の器官ではなく、根と断すべきである。

ついでに各地の同学の士に申し上げる。ハルジオンを可愛い、珍しいのとて甘やかすと、駆除困難な大害草になることを御理解戴きたい。株数の少い間に 1 本の根も残さず掘り上げてしまうがよい。さもないと、結実しなくても、地中に根の断片が残しさえすれば着実に増殖して行くのである。

The life-span in *Erigeron philadelphicus* is said to be biennial, perennial, or sometimes annual. According to some authors, this wide-ranging N. American species is perennial with stolons and offsets. In fact, the “stolons” and “offsets” are correctly called roots. The organ bearing offshoots has no reduced leaves externally, but has actinostele and branches endogenously. The radial vascular bundle is hexarch and surrounded by an apparent endodermis showing Casparian strips. (東京都立大学理学部・牧野標本館)

□清水基夫：日本のユリ A5 版，総アート紙，pp. 376 (内原色プレート 24 pp. 分)，単色写真，凸版図 (内外古典の複写など) 多数 誠文堂新光社 1971 年 7 月，¥ 4,500 我が国のユリ属は種類が多く (世界 96 種中 15 種)，少なからぬ固有種 (7 種) はその美をもって世界の園芸界に貢献している。ユリは環境の変化に敏感で，自生地から掘取って栽培すると，2, 3 年をまたずにいじけたり，ウイルスなどの病害に負けて，何年も連続しては作り難い。このために各種を一個処に蒐集して比較観察することは困難であり，地域的の変異の大なることと相まってユリ属は分類学的には苦手のものに属する。著者はこの困難な群に 1941 年頃以来本格的に取り組んで今日に到った。本書はその成果を大成したもので，ユリの研究・栽培の歴史，文化史，分類・分布，各種の来歴・性状，変・品種，育成された種間雑種，栽培法のほかに，挿話的な短文が余白にある。‘日本のユリ’ではあるが，必然的に外国の歴史，種類，その園芸的の現状にも多くのページを割いている。著者がユリを求めて薩南・豆南諸島から北は北海道に到るまでの遍歴の足跡は美しいカラープレート，単色の挿入写真にその一部が現われている。戦前，山掘りを主とするテッポウユリの球根は世界の市場を独占していた。

これが戦時中にアメリカで品種改良が進み、同地における自給体制の確立に伴い、一時不振に陥ったことなど園芸業界におけるユリの消長の歴史も興味が深い。(津山 尚)

○ヤグルマアザミ北海道に帰化す (浅井康宏) Yasuhiro ASAI: On Brown Knapweed, naturalized in Hokkaidô, Northern Japan

歐洲原産の多年草である *Centaurea jacea* Linnaeus, Sp. Pl. 914 (1753) は、既に古く明治末年に我国へ観賞用として輸入、栽培された記録がある。一方、本種は現在、北アメリカやカナダなどの路傍、荒蕪地にも広く帰化しており、Brown Knapweed あるいは Brown-headed Knapweed と呼ばれている。ところで頃日、筆者は北海道に帰化していると言うヤグルマギク属の標本を調べる機会を得たが、種々検討の結果、上記のものと判定した。

周知の通り、現在まで我国に渡来、帰化した記録のある *C. melitensis* L., *C. solstitialis* L., *C. calcitrapa* L. などの本属の各種は、いずれも全草(特に総苞片)に鋭い棘を有しているが、しかし本種は草丈 1 m 内外にも達し、頭状花も略 3 cm 許で、しかも桃紫色の顕著な舌状花を有しており、全草を含め総苞片も無棘である。また総苞片附属物は櫛歯状に細裂せず、不整に浅裂する特徴をもち、近似種との区別点となっている。なお、今回の標本は、北海道東部の標茶町、別海村の西別川の支流であるボンベツ川流域(海拔 40~50 m)において、1967年8月25日に採集されたものである。因みに本種は現在、局所的にもせよ可成り広く拡まっているらしく、採集者のノートによれば、該地の路傍など約 2 km の範囲に亘って分布し、シロツメグサ、アカザ sp., エゾイラクサなどと混生して生育している由である。その近郊は、明治末年頃から開拓が行われ、現在もおお略農が続けられているとのことであるから、恐らく栽培逸出起源と考えるよりも、むしろ北アメリカなどから牧草などに随伴して持込まれた帰化植物の一つと考える方が妥当と思われる。

終りに、本種を採集され、詳細な生育、分布記録をよせられた細川音治氏、また興味ある標本の検討の機会を与えられ、種々御援助下さった東京大学理学部植物学教室の原 寛教授及び黒沢幸子氏に対し、謝意を表する次第である。(東京歯科大学)

Summary

Centaurea jacea Linnaeus is widely distributed in Europe and naturalized in North America. Recently, the plants were found in waste grass-fields along the Nishibetsu river (ca. 40-50 m. above the sea level), eastern part of Hokkaidô. But, these may have probably been introduced from Europe or North America mixed up with grass seeds for pastures imported from the same regions. At present, this Brown Knapweed established make a new addition to the local flora of the Hokkaidô, Northern Japan.